

平成10年度

青少年教育施設における学校外活動の充実

— 青少年教育施設における学社融合事業の実施 —

川崎市総合教育センター 社会教育Ⅱ研究会議

青少年教育施設における学校外活動の充実

— 青少年教育施設における学社融合事業の実施 —

社会教育研究会議Ⅱ

熊谷 道廣¹ 市川 正行² 高尾 寛雄³ 五十嵐豊和⁴ 佐久間雅彦⁵
三木 武⁶ 添野 雅美⁷ 前島 誠一⁸ 枝村 知⁹

要 約

川崎市の青少年教育施設においては、これまでも子どもの自主性・自発性・自治性を育む活動を展開してきた。今日の教育の課題である「生きる力」を育むためには、「学校」「家庭」「地域」の連携と相互補完を深め、教育的機能が一体的に発揮できる基盤の整備が求められている。その一つとして「学社連携」が進められてきたが必ずしも十分とはいえず、学校教育と社会教育がお互いの役割分担を前提とし、学習の場や活動など、両者の要素を部分的に重なり合わせて、子どもの教育に取り組む「学社融合」へと移行した。

「学社融合」の実験的事業として、宿泊型施設の青少年の家では、豊かな学校外生活を体験するため、3泊4日の宿泊をしながら通学し、異年齢の仲間と人間関係を深め、生活を丸ごと楽しめるようなプログラムを西梶ヶ谷小学校との連携で実施した。また自然系博物館の青少年科学館では、平中学校と連携して、総合的学習に対応できるようなプログラムを共同で開発し、1学年を対象とした授業の展開を試みた。

キーワード：青少年教育施設，学社連携，学社融合，総合的学習，生きる力

目 次

I 主題設定の理由	182	2. 「学社融合における中学校の総合的な学習指導」	189
1. 研究のねらい	182	(1) 仮説	189
2. 研究の方法	182	(2) 研究の組織	190
II 研究の内容	182	(3) 学社連携授業までの経過	190
1. 青少年の家における学社融合事業の実施		(4) 学習教材	190
.....	182	(5) 平成10年度の学社融合授業の展開	191
(1) 「ほのぼのスクール」における仮説	182	III 研究の成果と今後の課題	191
.....	182	1. 研究の成果	191
(2) 「ほのぼのスクール」の概要	182	2. 今後の課題	191
(3) 「ほのぼのスクール」に関する調査	184	おわりに	191
.....	184	参考文献	192
(4) 調査のまとめと今後の課題	188	助言指導者	192
		別表 1	192
		別表 2	193
		別表 3	194

¹ 生涯学習推進課主査(研修員) ² 青少年活動事業室長(研修員) ³ 青少年の家指導主事(研修員)
⁴ 青少年の家職員(研修員) ⁵ 青少年科学館指導主事(研修員) ⁶ 青少年創作センター職員(研修員)
⁷ 西梶ヶ谷小学校教諭(研修員) ⁸ 平中学校教諭(研修員) ⁹ 川崎市総合教育センター社会教育主事

I 主題設定の理由

1. 研究のねらい

川崎市の青少年教育施設は、宿泊型施設、博物館施設、野外活動に応じる施設などさまざまである。その中で子どもが主体的に取り組める活動、集団に参加できるような準備、活動の組織化の準備の場を設け、子どもの自主性・自発性を育む機会は、これまでも実践してきている。

しかし、完全学校週5日制の導入とともに「生きる力」を育むためには、「学校」「家庭」「地域」が連携し、相互補完し教育的機能が一体的に発揮できる基盤の整備がより強く求められている。

昭和46年（1971年）4月、社会教育審議会から『急激な社会構造の変化に対処する社会教育のあり方』についての答申（以下「46答申」という）が出された。この「46答申」では、生涯教育の観点から生涯にわたる学習の継続だけでなく、家庭教育・学校教育・社会教育の三者の有機的な統合を求め、乳幼児から高齢者まで生涯各期における社会教育の課題を提示している。

この後、相次いで出された建議・答申等もこの「46答申」の延長線上にあり、青少年教育の振興のため、地域社会での異年齢集団との交流と活動、遊び場やスポーツ活動、文化活動のための施設の拡充など青少年期に対する社会教育への期待を述べている。

また、平成10年（1998年）9月の『社会の変化に対応した今後の社会教育行政のあり方について』（生涯学習審議会答申）では、「子どもたちの生きる力を育むために学社融合の必要性がいわれ、さまざまな場面で取り組みが始まっているが、いまだ学校教育と社会教育の連携は不十分といわざるを得ない。学校教育と学校外活動があいまって、子どもたちの心身ともにバランスのとれた育成が図られることとなる。昨今の子どもたちを巡る環境を考えると、早急に学社融合の実を上げていかなければならない。」といわれている。

昨年度は、川崎市の青少年教育施設の活動が教員にどのように受け止められているのか、そこでの期待と問題点について調査し、「学社融合」の理念に立った事業展開への手掛かりを考えることにした。調査の結果、各施設によって多少の差異はあるが、全体的に「体験学習」のための「プログラムの開発」および「施設・設備の充実」が期待され、社会教育施設の認知度の低さと教員の負担と責任の問題が明らかになった。

これらの結果を踏まえて、子どもが夢や希望を持ち、生きる力を養う魅力あるプログラムを拡充する必要がでてきた。それは、参加者が楽しめるバラエティーに富んだものであり、興味や関心が継続し発展していくため、施設機能の連携が図られたものでなくてはならない。さ

らに、学校教育、社会教育双方が生涯学習の一部として関わっていきけるプログラムであることが求められる。

そのため、教員、職員が学校の授業、青少年教育施設事業の企画・運営に参加したりすることも必要になろう。また、教科学習として組み入れることができるプログラム開発など、教員の負担の軽減や解決に向けた方法を探る必要もある。

そこで、今年度は体験学習として「ほのぼのスクール」、教科学習との連携として「学社融合における中学校の総合的な学習指導について」を実施した。学校の中に、社会教育活動が定着していくための実験的な「学社融合」事業であり、学校における教育活動と結びついて、青少年教育施設の充実・発展をめざして、主題を設定した。

2. 研究の方法

- (1) 体験学習として「ほのぼのスクール」の実施とその結果の分析をした。
- (2) 教科学習との連携として「学社融合における中学校の総合的な学習指導について」の授業実践を行った。

II 研究の内容

1. 青少年の家における学社融合事業の実施

(1) 「ほのぼのスクール」における仮説

- ①一緒に宿泊し協働で活動する一体感は、社会性・自立性を育む。
- ②年齢の異なる集団で、子どもどうしの社会関係を培い、心ゆくまでの遊びと生活は、創造性と探求心を育成する。
- ③学校・地域・家庭での生活を丸ごと楽しむという体験をする。

(2) 「ほのぼのスクール」の概要

①事業の特徴

学校教育と社会教育の融合の理念に立った体験学習として、西樫ヶ谷小学校4年生～6年生26名が、社会教育施設である青少年の家に宿泊しながら通学するものであった。学校や家庭では体験できない活動、レクリエーション等を通じて、仲間づくりを図るとともに、今まで味わうことのできない感動や自分を発見する体験の場となるようにした。

実施日は、1学期の終わりである7月15日（水）～7月18日（土）の3泊4日に行った。

テーマは、「自分でやろう！みんなとやろう！」とし、野外料理（薪炊飯）・キャンドルファイヤー・星座教室・竹細工・洗濯等、集団宿泊を通じて、普段味わうことのできない体験活動を中心に考えた。

②西樫ヶ谷小学校との連携

「ほのぼのスクール」の実施にあたっては、学社融合

事業ということを念頭におき、青少年の家と西椀ヶ谷小との連携は密接に行った。

西椀ヶ谷小学校の5月の職員会議で、「ほのぼののスクール」実施要項を提案し、教員に理解を求めた。教員からいくつかの疑問や問題点の指摘があり、6月の職員会議には、Q & Aという形で青少年の家の職員が直接学校に出向き説明をした。

チラシの配布と申込みの提出先は担任にお願いし、参加児童の把握をしてもらった。また、保護者の懇談会では、青少年の家の紹介と「ほのぼののスクール」の案内ビデオを各クラスごとに上映してもらい、保護者への広報をお願いした。

参加者が決定した後には、参加児童の担任と青少年の家の職員で、事前の打ち合わせを行った。

実施期間中には、子どもたちが「ほのぼののスクール日記帳」に、今日のできごとや感想を書き、毎日担任に見せ、青少年の家での生活の様子を知ってもらった。その他にも電話や連絡帳で連絡を取り、学校生活に支障がないように考慮していった。

今回の「ほのぼののスクール」を実施するには、以下のような経過があった。

月 日	内 容
5月28日(木)	西椀ヶ谷小職員会議に「ほのぼののスクール実施要項」を提案
6月9日(火)	教育委員会等に趣旨を説明
6月21日(金)	社会教育研究会議Ⅱ
6月24日(水)	西椀ヶ谷小職員会議に「計画案とQ & A」を出向いて提案
6月26日(金)	広報用チラシ配布
7月2日(木)	高津支部校長会で趣旨を説明
7月3日(金)	西椀ヶ谷小懇談会でビデオ放映
7月8日(水)	各担任に申込用提出用紙 社会教育研究会議Ⅱ
7月9日(木)	参加者通知を各担任から配布
7月10日(金)	保護者説明会(参加者22名)
7月14日(火)	西椀ヶ谷小で担任と職員の事前打ち合わせ
7月15日(水) ～18日(土)	「ほのぼののスクール」実施

③「生きる力」を育むプログラム

「ほのぼののスクール」の仮説を立証していくためには、プログラムが最も重要で、今回は「自分でやろう！みんなとやろう！」をテーマに、「生きる力」を育めるようなプログラムを作成した。

計画の段階から、西椀ヶ谷小学校の児童や教員の意見

を聞きながらプログラムを立てた。

プログラムの作成で大切にすることは、学校や家庭では体験できないようなものとし、学校の授業の補習的な内容にならないよう留意した。また、時間的なゆとりを持たせるよう配慮した。各プログラムでは、専門の講師をお願いし、子どもたちに本物を味わってもらうようにした。

「ほのぼののスクール」プログラム

第一 日 目 7/15 (水)	15:00		15:30		16:30		17:45		18:30		19:00		20:30		21:30	
	集 合	開 校 式	自 主 学 習	ニ ュ ー ス ポ ー ツ (と り あ え ず コ ル ム ・ イ ン テ ィ ン グ)	夕 食	自 由	① 仲 間 づ く り ゲ ー ム		入 浴	消 灯						

第二 日 目 7/16 (木)	6:00		6:45		8:00		15:00		19:00		19:30		20:30		21:30	
	起 床	朝 食	学 校	買 い 出 し ・ 野 外 科 理 づ く り (カ レ ー ラ イ ス)				自 主 学 習	② 星 の 観 望		入 浴	消 灯				

第三 日 目 7/17 (金)	6:00		6:45		8:00		12:30		13:30		16:30		17:45		18:30		20:30		21:30	
	起 床	朝 食	学 校	③ 竹 細 工 と 遊 び		自 主 学 習	夕 食	④ キャ ン ド ル フ キ ャ イ ヤ ー		入 浴	消 灯									

第四 日 目 7/18 (土)	6:00		6:45		8:00		12:10		12:50	
	起 床	朝 食	学 校	反 省 会 と 閉 校 式						

【講師名】

- ①野口 通 (国際自然大学校)
- ②水島 治 (青少年科学館)
- ③安藤 二男 (元栗木台小学校長)
- ④野口 通 (国際自然大学校)

④家庭との連携

今回の学社融合事業では、青少年の家と西椀ヶ谷小との連携だけではなく、家庭との連携も密にしていた。

応募のときの保護者懇談会では、青少年の家の紹介と「ほのぼののスクール」の案内ビデオを上映した。さらに、7月10日(金)には、青少年の家で参加児童の保護者を対象に説明会を実施した。保護者の関心は高く、参加者22名と、ほとんどの保護者が参加した。しおりに基づいて当日の内容を説明し、理解と協力をお願いした。

入所式も大勢の保護者が参加し、「ほのぼののスクール」は始まりから盛り上がったものになった。

緊急の時には、すぐに連絡できるように、いつ、どこに連絡をしたらよいか、自宅だけではなく細かい連絡先を知らせてもらった。実施中、保護者の参観は自由いつでも見学できるようにした。

⑤参加者及び班編成

今回の参加者は、男子8名、女子18名計26名であった。班編成は、学年男女混合異質になるよう編成した。班編成については、以下の通りである。

班編成

	1班	2班	3班	4班	合計
4年男子	2	1	1	2	6
4年女子	3	4	4	4	15
5年男子	0	1	1	0	2
5年女子	0	0	0	1	1
6年男子	0	0	0	0	0
6年女子	1	0	1	0	2
計	6	6	7	7	26

(3) 「ほのぼのスクール」に関する調査

①調査の意義と内容

「ほのぼのスクール」について、参加児童をはじめ保護者や西堀ヶ谷小の教員はどのように感じているのか、アンケート調査を実施した。

ほのぼのスクールに参加した児童は、参加前と参加後でどのような変化をしているのか。また、今回の仮説である「協働で活動する一体感」「年齢の異なる集団による生活体験」「貴重な体験」がどのように影響したのか調査を行った。

保護者については、参加児童がどのような変化をしたのか、仮説をふまえて調査した。教員は、「学社融合」についての考え方を目的として調査を行った。

いずれの項目にも、選択肢を設け、その後に自由記述できる欄を設け、いろいろな意見が聞けるようにした。

②調査対象

- ・参加児童 26名
- ・参加児童の保護者 26名
- ・参加児童の担任 7名

③調査方法と時期

対象者	第1回目	第2回目	調査方法
参加児童	7月15日(水)	7月18日(土)	プログラムの中で実施した。
参加児童保護者	7月15日(水)	7月31日(金)	第1日目は7月10日(金)の保護者説明会に配布し、15日提出。第2日目は、18日に配布し、31日までに郵送してもらった。
参加児童の担任	9月5日(土)		7月22日(水)に配布し、9月5日に回収した。

④調査の結果と考察

ア. 参加児童への調査

(7)参加への意識について

参加児童の参加動機と終了後の感想の結果は、次のとおりである。

(質問)「ほのぼのスクール」にどうして参加しようと思いましたか。【事前調査】

- 面白そうだから 80.5%
- 親が決めた 6.5%
- 友達が行くから 6.5%
- その他 6.5%

(質問)「ほのぼのスクール」が終わって、どんな感じですか。【事後調査】

- もっとやりたかった 32.4%
- 楽しかった 32.4%
- 疲れた 21.6%
- ほっとした 8.1%
- その他 5.5%

事前調査の結果では、「おもしろそうだから」「いろいろな人と友だちになりたい」「自分でやれる」(自由記述欄)と書いている内容が圧倒的に多く、「ほのぼのスクール」への期待と意欲が伺える。

事後調査では、「もっとやりたかった」「楽しかった」が多く、それは「みんなと一緒に」「家や学校では、できないことがいろいろできた」と、どの子も満足していた。

今回の体験学習としての「ほのぼのスクール」は子どもたちの期待を満たしたようである。

(4)実施期間について

図-1は「ほのぼのスクール」を3泊4日で実施したが、参加児童にとって適当であったかどうか、事前と事後の調査結果を比較したものである。()は事後調査。

図-2は、長いか短いと答えた児童に、どれぐらいの期間が適当か、自由に書いてもらった結果である。

図-1

(質問)「ほのぼのスクール」を3泊4日で行いますが(行いましたが)、長いと思いますか。(単位%)

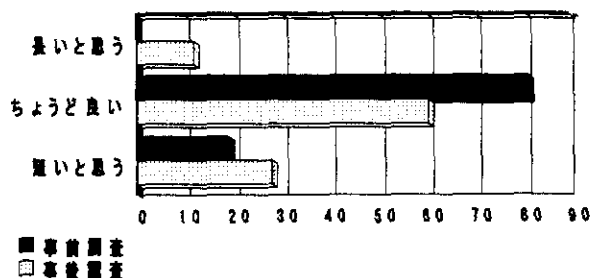


図-2

(質問)長いか短いに○をした人は、どれぐらいがよいですか。(単位%)

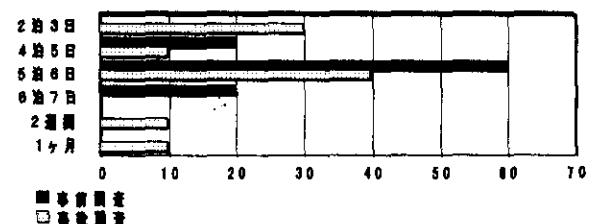


図-1を見ると、今回の「ほのぼのスクール」は、3泊4日が適当だったといえよう。事前と事後を比較すると「ちょうどよい」が減少して「短いと思う」が多少増えている。これは、プログラムの内容が楽しかったので、

短いと感じた人が増えてきたのではないかと考える。

図-2の結果をしてみると、事前・事後とも5泊6日がよいの回答が一番多かった。

初日の子どもたちは、どの子も緊張して遠慮がちに自分を出せなかったが、2日目あたりから、みんなと仲良く楽しそうに過ごしていた。3日目になって、グループ間でトラブルが起こってきたり、自己主張がでたり、子どもたちの本音が見られるようになってきた。それらの問題を自分たちで解決しようとする姿がみえた矢先に3泊4日が終了してしまった。

(ウ)楽しかったこと

図-3は、「何を楽しみにしているのか」「何が楽しかったのか」を自由に書いてもらった結果である。

図-3

(質問)「ほのぼののスクール」で、どんなことが楽しみですか。(楽しかったですか)(単位%)



図-3の事前調査の結果によると、「みんなと仲良く生活して過ごす」「自分でいろいろできる」「家でできないこともできる」など、抽象的なことが多くあげられていた。事後調査になると「野外料理」「キャンドルファイヤー」「たこづくりと竹細工」というように具体的な内容に変わってきている。

野外料理が最も人気が高かった理由は、カレーの材料の買い出しや薪を使ってのご飯炊きなど、普段、家庭や学校では体験できないからではないかと考える。

また、キャンドルファイヤーや竹細工やゲームは、専門的な講師を招いて実施したので、子どもたちは十分満足したのではないかと考える。

(イ)心配事について

(質問)「ほのぼののスクール」で、何か心配なことはありますか。

- ・朝早く(6:00)起きられるか(4人)
- ・違う学年の人と仲良くできるか(2人)
- ・その他(6人)
- ・なし(14人)

合計26人

ほとんどの子は何も心配事がないようだが、「朝早く起きられるか」「夜寝られるか」等、日常生活への不安があった。早寝・早起きができない今の子どもたちにと

っては、一緒に宿泊し、共同生活を体験することは、基本的な生活習慣を再考するきっかけでもある。また、「違う学年の人と仲良くできるか」については、グループ活動などが協働の意識を生み、子どもどうしの社会関係を培った。「ほのぼののスクール」は、ひとりひとりの役割を重ね合わせて成立する小さいながら社会を経験する機会でもあった。

(ウ)また参加してみたいか

事後にまた参加してみたいかどうかの調査結果である。その理由を自由記述したものをまとめた。

(質問)また「ほのぼののスクール」に参加してみたいですか。(単位%)

参加したい	96%
どちらでもない	4%
その理由	
今回楽しかったから	68%
ゲームをしたいから	12%
友達と仲良くなれるから	12%
面白い友達がいるから	4%
いろいろ体験できたから	4%

などがあげられている。

以上のように、また「ほのぼののスクール」に参加してみたいと答えた人がほとんどだった。その理由で、最も多かったのが「今回楽しかったから」である。今回のプログラムは、時間を細分せず、楽しみが中断されないような配慮があったからではないか。また、「友達と仲良くなれるから」「おもしろい友達もいるから」等、人間関係の楽しみが継続したからであろう。

(イ)事後の感想

(質問)その他どんなことでもよいので、自由に自分の考えを書いてください。

- ・とっても楽しかった。(4人)
- ・自由な時間をもっとほしい。(3人)
- ・友達がいっぱいできておもしろかった。(2人)
- ・来年やれば、50人は集まると思う。(2人)
- ・また、カレーを作りたい。(1人)
- ・なし(10人)

「とても楽しかった」「友達がいっぱいできておもしろかった」という意見が寄せられた一方、「自由時間をもっとほしい」「消灯時間をのばしてほしい」等の感想もあった。ゆとりの時間の設定とプログラムの調和は今後の課題である。

イ. 保護者への調査

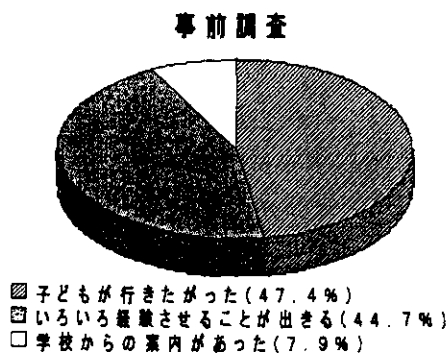
(7)参加への意識について

図-4は事前調査として、保護者に子どもを参加させ

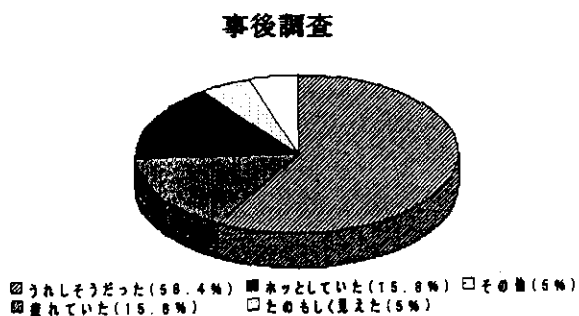
たい動機と事後調査として、子どもの印象を聞いた結果を比較したものである。

図-4

(質問)「ほのぼのスクール」に参加させようと思った理由はどんなことですか。(単位%)



(質問) お子さんが「ほのぼのスクール」を終えて帰ってきたときは、どんな印象でしたか。(単位%)



事前調査の結果では「子どもが行きたがった」「いろいろ経験させるよい機会だと思った」が、半数ずつだった。参加児童の結果と比較してみると、児童の場合「親がすすめたから」はほとんどいなかったが、保護者での調査では、約50%以上の方が親が決めたと答えている。

また、帰ったときの印象では「うれしそうだった」が半数以上を示している。約30%の方は「疲れていた」「ホッとしていた」等と答えており、子どもたちはかなり疲労したようである。

(イ)実施期間について

図-5は「ほのぼのスクール」を3泊4日で実施したが、保護者はどうとらえていたかを、事前と事後の結果を比較したものである。

(質問)「ほのぼのスクール」を3泊4日で実施します(実施しました)が、期間としてどのように思いますか。(単位%)

図-5

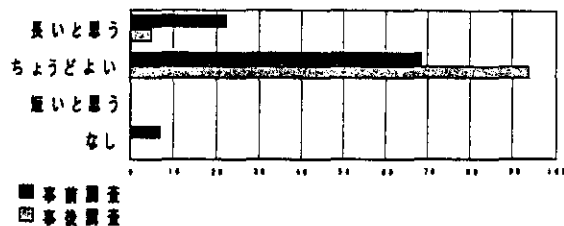


図-5を見てみると、実施期間として3泊4日がちょうどよいと答えている。事前と事後をくらべてみると、事前調査では、長いと思っていた人が事後調査になるとちょうどよいに変わった人が若干名見られた。

図-1の参加児童と比較してみると、参加児童は短いと思うと答えた人がいたのに、保護者の場合は短いと思う人は一人もいなかった。

(ウ)参加しての子どもの変化

「ほのぼのスクール」に参加して、子どもに何か変わったところが見られるかを、事後調査した。

(質問)「ほのぼのスクール」に参加して、お子さんに何か変わったところが見られますか。

変わらない	66.6%
多少変わった	22.2%
とても変わった	5.6%
なし	5.6%

また、何が変わったのか具体的に書いてもらった結果は次の通りである。

(質問)どのように変わったか具体的に書いてください。

- ・家の手伝いを積極的にするようになりました。例えば、外出時、母親が妹の紙おむつを忘れたとき、うんちをしてしまったのですが、「僕が買ってくる」といって、さっと行動したときは、感激しました。
- ・頑固な考え方から柔軟な考え方、言い方に変わっている。
- ・顔は知っていても、話をしたことのなかった人とも、仲良くなれたと楽しそうに話していました。
- ・パジャマをきちんとたたむようになりました。
- ・気持ちの上では、わがママが通らないということがわかったようですが、まだまだのようです。

子どもたちの様子の変化では、66.7%が変わらないと答えていた。ほのぼのスクール3泊4日だけで、極端な変化はみられないのも当然であろう。ところが、「多少変わった」「すごく変わった」が27.8%いた。

特に「家の手伝いを積極的にするようになりました。」と具体的な例をあげているものもあった。

(1) また「ほのぼのスクール」に参加するか

図-6は、また「ほのぼのスクール」に参加してみたいか（参加させてみたいか）を、参加児童と保護者に聞き、その結果を比較したものである。

図-6

（質問）また「ほのぼのスクール」に参加してみたい（参加させてみたい）と思いますか。（単位％）

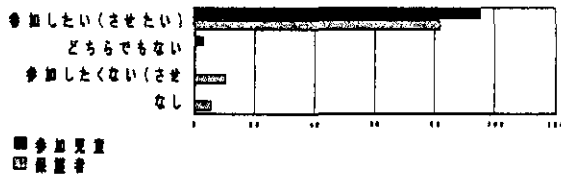


図-6の結果を見ると、参加児童も保護者もほとんどがまた「ほのぼのスクール」に参加してみたいと答えている。

(4) 感想・意見について

最後に自由記述で事前と事後に、感想・意見を書いてもらった。原文のまま載せた。

（質問）その他どんなことでも結構ですので、ご意見・ご感想をお書きください。

【事前調査】

- ・できれば大人の助言は、極力少なくしていただいて（せめて生活面だけでも）どんなことが一人では困るか、自分で考える能力をつけて、帰ってきてほしいのでお願いします。

【事後調査】

- ・はじめは少しドキドキしていたようですが、学年の違う子どもたちとも楽しく、しかも仲のよい子どもと一緒に過ごすことができ、とてもよい体験ができたようです。カレーづくりもご飯の係りで、薪を割ったりしたのがうれしそうです。
- ・ほんの少しですが、自分で自分のことをして成長したようです。家族に対して、友達に対して思いやりの気持ちが持てるようになったようです。親としてはとてもうれしいことです。

ウ. 参加児童の担任への調査

教員については、事前調査を実施することができなかった。「ほのぼのスクール」終了後の7月22日（水）に調査用紙を配布し、夏休みを終えた9月5日（土）に回収した。

(7) 問題点と要望

準備の段階で何か問題点や要望がないかを調査した結果、80%の担任があると答えている。どんなことが具体的に書いてもらったものが次のようなことである。

（質問）あると答えた人は、どんなことですか。

- ・学校側との打ち合わせの時期や内容についても、どのようにして決まったのかわからない。
- ・時期的に教師も子どもも忙しいので、細かいこと（荷物、気持ち等）で気になっていました。

以上のように、ほとんどの教員が問題や要望があると答えている。内容的には、「もう少し早い段階で話が聞きたかった」「学校との打ち合わせの時間がほしい」等、学校と十分な話し合いをもってほしいという意見がだされている。

(4) 実施期間について

図-7は「ほのぼのスクール」を3泊4日で実施したが、その期間についてどう思っているかの結果をまとめたものである。

図-7

（質問）「ほのぼのスクール」の期間は、3泊4日でしたが、どう思いますか。（単位％）

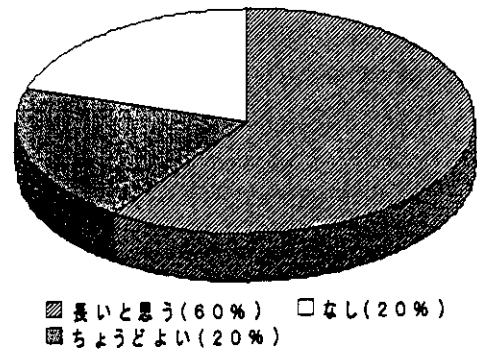


図-7の結果を見ると、3泊4日が長いと思っている教員が半数以上であった。参加児童や保護者の結果とは隔たりがみられる。

(7) 子どもの変化

「ほのぼのスクール」の期間中、子どもたちに変化が見られたかを聞いた調査では、約60%の教員が変化が見られなかったと答えている。変化が見られたと答えた教員の内容は、「2日目になると眠いという言葉が出はじめた」「寝られず、ふらふらしている子がいた」等であった。

(1) 来年度の実施

来年度も実施してほしいかを調査した結果、33.3%の教員が実施してほしいと答えていた。その理由は次の通りである。

（質問）理由をくわしくお書きください。

- ・お母様、子どもからよい体験をしたという手紙を

いただきました。

- ・恒例になれば、より学校とも十分話し合いがされるようになるのでよいと思います。
- ・プール実施日が期間に2回あったので、健康管理の面で大変だったと思う。
- ・かわり方が中途半端で、子どもに対してのフォローが十分でなかった。また、余裕もなかった。

次年度の実施についての調査では、半数以上がどちらでもないと答えているが、3割の教員は実施してほしいと答えている。

今回は、学社融合の理念に立った事業ということで、学校と社会教育が今まで以上に連携を密にして「ほのぼののスクール」事業を実施した。ところが、教員にとっては、もっと事前に打ち合わせをし、今回以上にかかわりを持ちたいという意見が多く聞かれた。

(オ)意見と感想

(質問)その他、どんなことでも結構ですので、ご意見ご感想をお書きください。

- ・自然教室へ向けて、よい勉強ができたと思う。参加した児童に期待したい。
- ・子どもたちの経験を増やすという点では、とてもユニークな試みだと思います。しかし、青少年の家、家庭、学校の連絡調整をどのようにとるのか問題があると思います。一番気になったのは、子どもたちの気持ちの問題のケアです。日頃うっせきした不満を一気にいっていました。

「子どもたちの気持ちの問題のケア」については、どんな内容なのかははっきりしないが、子どもたちの不満を解消するためには、学校、家庭、地域がより連携を深め、お互いに連絡を取り合って、解決していかなければならないのではないだろうか。だからこそ、今回のような「ほのぼののスクール」事業が必要になってくるのではないかと考える。

(4) 調査のまとめと今後の課題

学校の中に、社会教育活動の定着をはかるための実験的な「学社融合」の理念に立った事業として、青少年の家と西梶ヶ谷小学校が連携して、「ほのぼののスクール」を実施した。参加児童や保護者にとっては、大変満足してもらったようだ。

今回のアンケート調査は、「参加児童」「保護者」「参加児童の担任」の3つに分けて行ったが、アンケート調査のみではなく4日間の事業実施中の様子を含めてまとめた。

①「ほのぼののスクール」での子どもの様子や生活

プログラムには合同で行うものとして、キャンドルファイヤー、星座教室、たこづくり、仲間づくりゲーム。役割を分担して行う、野外炊飯、食材の買い物。好みに応じて選択できるスポーツ活動。個人で行うものとして、洗濯などを取り入れた。そこには、子どもたちが創造性を持って主体的に取り組める活動(たこづくりや買い物)や一体感をもった集団での活動(キャンドルファイヤーや仲間づくりゲーム)を意識した。

また、生活の中心となる班は、4年生～6年生が混在するようにした以外は、無作為な編成とした。班の中には、班長、副班長、食事係、生活係、保健係などを作り、いずれかの役割を持たせるようにした。班での役割は、快適な生活を過ごすため、その裏側では、どのような営みがなされているかを知るために必要なものとした。これらのプログラムや係り活動は、休息、遊び、学習、労働の要件を含み、少年期の発達課題である自発性、活動性を満たすように配慮した。

日常生活では、あまり体験する機会の少ない薪での炊飯、手洗いで洗濯などに戸惑いは見せたものの、実際の体験と一人一役という行動の分かち合いは、「みんなと仲良くなれた」という一体感や社会性を育み、「また料理をしてみたい」という意欲となった。

今回の3泊4日では、生活と人格の丸ごとをふれあいになる直前の、まだ遠慮がちな人間関係のまま終了してしまった。友達と口げんかになってしまったというような場面が出始め、自分たちで自治性を発揮し、どのような解決を図るかに至るまでの時間がなかった。また、課題のある時間が多く、「ゆとり」を自らで使いこなす時間設定が不十分であった。

②「ほのぼののスクール」と保護者との連携

ほのぼののスクールへの参加は、「子どもが行きたがった」「いろいろな経験をさせるいい機会だと思った」ので、参加させたという親が大半である。親の期待には、「異年齢の子どもとの共同作業」「みんなといるのが楽しみ」「楽しい時間を過ごす」ことがあげられている。少子化、多忙化の中で、なかなか克服できない現代型貧困といわれる、仲間、空間、時間の回復を求めていることが伺い知れる。

ところで、この期間中、親の参観は自由であったが、参観者は多くなかった。子どもの成長に地域の親たちが目を注ぎ、子どもの生活の一端を知り合うため、子どもが学校にいる時間に、青少年の家での様子を伝える保護者の交流会の場を設ける必要があった。

この3泊4日が終了して、「子どもが積極的に家の手伝いをするようになった」「頑固な考え方が柔軟になった」「バジャマをたたむようになった」「わがママが通らないことがわかった」というような子どもの変化に目を

とめた親もいる。後日の報告会で、3泊4日の生活の様子をビデオ上映した際、改めて「生きる力」の内実を認識したようである。

③「ほのぼのスクール」と西樫ヶ谷小学校との連携

「ほのぼのスクール」のような、社会教育施設に宿泊し通学する事業は、全国のいろいろなところで行われている。（例えば千葉県では、8泊9日の事業を10年間続けている）

しかし、この「ほのぼのスクール」は、それらにみられない特色を持っている。それは実施にいたる経過で述べたように、職員会議での計画の提案、申込書の配布から受付までを担当が行うこと。通学に必要な学年別、クラス別の教材の準備の連絡（水泳指導）など、学校の協力がなしでは、とても成立の見込めない事業でもあり、西樫ヶ谷小との連携を緻密にしたことである。

活動プログラムごとに教員の参観があり、できあがった作品を持って、目を輝かせて走り寄る子ども、「このゲームは、先生にもできるよ」と一緒に活動を求めたり、「炊きあがったご飯は、こうやってまぜるの」という技に感心したり、クラス、学年を越えた教員と子どもの交流もあり、全体的には極めて好意的な協力が得られた。しかし、細部では、いかに教員の負担を軽減するか、もっと早い段階に、教員との事前の打ち合わせをするかなど、解決を図らなければならない問題もある。

④まとめ

この「ほのぼのスクール」は、子どもたちが日常に体験することの少ない活動を通し、仲間とふれあいながら共に学習し、共に生活する場である。そして、子どもたちひとりひとりが存分に個性を発揮し、活動の主人公となるプログラムの開発をめざした。

それらの課題や到達点については、これまでに述べてきた通りであるが、それらを整理しながら、社会教育における「生きる力」を育む視点を含めて検討を加えてみたい。

ア. 期間

午前は学校、午後から青少年の家という生活時間を設けるため、午前授業となる夏季休業直前の7月15日～18日の3泊4日とした。土・日や長期休業中の宿泊事業は、これまでも実施してきたが、学校及び学校外の生活を併せて体験したり、野外での活動を考慮に入れると、この時期の設定が望ましいと思われた。

集団生活の中で生じた問題に直面し、子どもたちが自主性・自治性を発揮して、その解決を図れるようになるには、どれくらいの期間であつたらよいかの検討や、ゆとりの時間を自分で使いこなす力を育むためには、課題のない時間、あるいは課題を発見する時間をプログラムに組み入れることが必要となる。

イ. 宿泊しながらの通学

異年齢集団での宿泊は、家庭では兄や姉でも弟や妹になれたり、その逆にもなれる。そのような場での協働は、成長への期待を高め、自分の中にある可能性を発見する機会となる。学校で学んだことを生かし、また宿泊の中で学んだ実践的な体験を、学校の中で体系的に深められるよう、宿泊しながらの通学とした。青少年の家から通学した体験は、仲間、時間、空間の広がりを獲得し、あるがままの人間関係の深まりとなった。

学校での姿、集団での姿、家庭での姿を伝え合い、重ね合わせたとき、子どもの本当の姿を見ることができた。

ウ. 生きる力と学校外生活

子どもたちは多忙化し、地域は通学路となりつつある今、子どもの持つ多面性を発揮できる機会が少なくなっている。わずか3泊4日であるが、子どもが「自らすすんで、手伝いをしてくれるようになった」という変化を目のあたりにし、「塾を休ませて参加させてよかった」という声は、それまでの児童観、教育観を新たにするものと考えられる。

子どもが主人公となり、自主的な活動をすすめる場、丸ごとひとりの人間として発達する場が、学校外に十分に整えられた時、子どもの「生きる力」を豊かに育むことにもなる。

2. 「学社融合における中学校の総合的な学習指導」

21世紀を間近にした今日、さまざまな形で教育の問題が取り上げられている。子どもたちの知的な欲求を満たす学習活動の展開が学校だけではなく、家庭、地域社会等の連携を通して、バランスの取れた教育を行っていくことが求められている。

そこで、社会教育施設としての川崎市青少年科学館と川崎市立平中学校との学社融合を念頭において、中学校の総合的な学習指導についての研究を重ね、授業実践を目指した。新指導要領が発表されて、生徒の学習実態に対応した基礎学力の一層の定着を図ることが求められている。「生きる力」の育成にあたっては、これまでの教科・領域だけでなく、総合的な視点に立った学習計画を創造していくことを目指した。

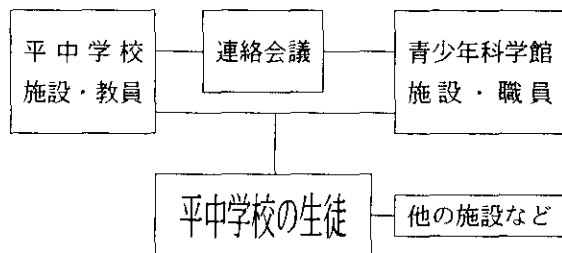
(1) 仮説

平中学校と青少年科学館との学社連携で3年間の継続した総合的な学習を授業実践をすることで、生徒が「自ら課題を設定し、それを解決しようとする考える力」が身につくものと思われる。

中学校の学習指導において、学習教材および教科指導などの教育課程を学校教育と社会教育施設（青少年科学館の施設及び、指導員）との両者が研究協議を行いながら生徒に学習指導を実践することで、生徒がより多くの

興味や関心をもてる内容の学習活動が展開できるものと思われる。

(2) 研究の組織



※他の施設としては川崎市総合教育センター・川崎市地名博物館・川崎市民ミュージアムなどの教育施設及び、地区の古老(平中学校を支えている教育懇話会の方など)

(3) 学社連携授業までの経過

①平中学校と青少年科学館との連携

川崎市立平中学校が所在する地域は、多摩川支流である平瀬川流域にあり、古くから川と住民の暮らしとが結びついていた土地柄である。平瀬川は生活と密接に結びついた身近な環境の一つとして重要なものである。

また、川崎市青少年科学館の位置する生田緑地は、川崎市でも貴重な丘陵の自然が残されている公園である。生田緑地などの丘陵からの湧水を集めた平瀬川流域は、集水域としての丘陵地形・段丘・川のまとまりの環境を構成している。

従来、平中学校と青少年科学館が近くにあるためプラネタリウムの利用を授業の一部に取り入れる学社連携の授業を行っていた。今回はさらに連携を深めた形で、1学年から3年間を通した総合的な学習を目指した学習題材を検討することになり、その中から、生徒が生田緑地内の湧水地などを観察したり、青少年科学館の施設を活用したりすることで自然に触れる体験を通し、生徒がより多くの興味や関心をもてるものと考えた。平中学校周辺の自然や地域を知り、環境教育へと発展できるような学習題材「地域を知ろう」を事例研究していくことにした。

②学社連携の授業と総合的な学習

前述した仮説を意図するために、青少年科学館の意義を理解できるような内容の学習題材を提案しながら、平中学校の生徒にとって、より興味・関心をもてる指導を提案していくように平中学校と青少年科学館との連絡会議を設定して、学社連携の授業を研究してきた。青少年科学館の職員と平中学校の理科教員とが科学の領域を中心に検討をした。そのなかで、生田緑地や平中学校周辺にある丘陵地に湧水が見られることから、湧水や地域の自然観察を中心にした学習題材として学社連携の授業を展開できないかということになった。

平中学校と青少年科学館との連絡会議で、生徒の「生

きる力」を育むうえで、地域の地形や自然を学習する際に身近な自然体験を取り入れることにより、生徒が何を考え、感じ取ることができるかを検討した。

自然体験をさせる観察のときに地形のようすを知るため、何種類かの地図を科学館の職員が準備した。それらの地図を検討していくなかで、この学習をすることで生徒のなかには理科的な発想だけではなく、地形的なことや地域の歴史的なことなども考える場面が多くみられるだろうと予想された。そこで、当初の科学的思考や、中学校の理科中心の学習を題材にした学社連携だけではなく、生徒がより興味・関心をもてるような総合的な学習を取り入れた学社連携の授業を目指すことにした。

③連絡会議と授業の展開

平中学校と青少年科学館との学社融合授業を実践するにあたって、平中学校の教員と青少年科学館の職員と連絡会議を重ね、生徒に対しての関わり方や指導内容、方法、さらに学習の題材をどのように時間配分していくかなど検討した。そして、連絡会議を通して青少年科学館の職員間、平中学校の教員間など各研究組織でさらに検討を重ねた。

ア. 施設、人の連携と活用について

今回の学習題材「地域を知ろう」で青少年科学館の施設及び、生田緑地を授業のどの場面でもどのように活用するのが学社融合授業としてより効果的で、機能的になるかを検討した。

また、青少年科学館職員と平中学校教員とが連携を密にする授業の中でチームティーチング(以下T.T.と略す)を数回行う際に、指導方法や支援の在り方など、生徒にどのように関わるのがよいのかをいろいろな状況を想定しながら事前準備や打ち合わせを行った。

イ. 他の施設や地域の方との連携

市内の他の教育施設や平中学校の教育懇話会など地域の方々にも協力を依頼して、今回の生徒たちがより地域を知るといふ総合的な学習活動に支援をしていただいた。

(4) 学習教材「地域を知ろう」の単元設定

①単元の目標

ア. 平中学校の学区について、年代別の地図を用いた学習を行い、身近な地形や地名の由来、歴史についての関心をもつ。

イ. 地図を用いた学習を発展させ、青少年科学館や生田緑地内の実地調査を行い地域の地形についての関心を深める。

ウ. 地域の学習によって得られた情報をもとに、個別に学習課題を検討し、複合的な課題別学習を行い、地域や環境への理解を深めていく。

②単元の構成

ア. 1年生では、生徒が主体的に活動して地域への関心

・理解をもつよう教員や青少年科学館の職員がT. T.などで協力をしながら支援をする。

(7) 明治以降の地図を準備し、色づけ作業から地域の地形を理解する。

(4) 地域の学習で得た情報から、課題別学習をグループ別に検討していく。

イ. 2年生では、地域理解への学習課題を生徒自身が考えながら教員や青少年科学館の職員の支援を受けて、学習活動を展開する。

(7) 地域社会の中で、平地区周辺の集落のようす・農作物などの特産品・民話などを昔のようすを知る地域の古老から聞き取る活動や資料の収集を計画し、実際に学習を行う。

(4) 地形の変遷などについて、地層の資料や柱状図などを使って調査研究をしていく。

(9) その他の生活環境や地理的な環境など、いろいろな課題を見つけられるようにする。

ウ. 3年生で、地域の将来についての展望や自分たちでできる環境の問題点などを話し合い、身近な地域との結びつきを持つように自覚する。

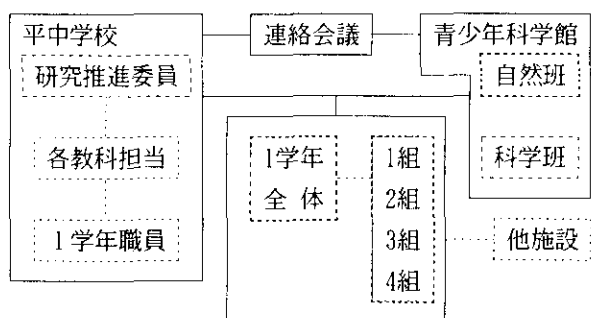
(7) 1年生、2年生で学習したことをもとに、自分たちが興味・関心をもった課題を継続研究していく。

(4) 環境について、総合的な考え方をもち、いろいろな活動をイメージする。「10年、20年後の平地区はどうなっているだろうか」具体的な例を想定した話し合い活動を行う。

(5) 平成10年度の学社融合授業の展開

①対象生徒と指導組織

対象生徒	平中学校 1学年 124名
	1組30名 2組33名
	3組30名 4組31名



②指導の形態

- (A) 青少年科学館職員などと平中学校教員とのT. T.
- (B) 青少年科学館職員による専門的な内容や作業的な指導。
- (C) 平中学校教員による学習指導。
- (D) 他の施設や地域の人による指導。

(E) 授業の形態として、グループ別やクラス、全体一斉などが考えられる。

(6) 指導計画と展開(案)

平中学校の生徒の実態をレディネス調査してから、目標と支援について検討し、指導計画を立て、授業実践を展開した。

①レディネス調査から(別表-1)

レディネス調査の結果から、一部の生徒を除いて、地図への理解や地域への関心がそれほど高いとはいえず、川崎市や宮前区の位置的な理解が十分とはいえない。そこで、授業展開を支援の方法などを毎時間ごとに検討しながら実践していくことにした。

②指導計画(別表-2)

③授業の展開例(別表-3)

III 研究の成果と今後の課題

1. 研究の成果

本研究会議で実施した異年齢での集団宿泊は、兄・姉から弟・妹への立場の転換があり、成長への期待を抱いたり、成長の過程を確認することのできる機会となった。また保護者や子どもが青少年教育施設を身近なものとしてとらえ、気軽に入出入りする契機ともなった。教科学習と連携するプログラム開発では、学芸員との共同作業により生徒に親しみやすい内容の授業展開ができた。このふたつの実験的事業は、「学社融合」の新たな形態を開くものといえよう。

2. 今後の課題

宿泊プログラムは、教員や児童の意見も取り入れながら作成したが、学校との連携を深め、子どもの声を反映するためのシステム作りが必要である。青少年科学館との融合事業では、総合的な学習の広がりには単館の対応では授業実践の全てをカバーできるわけではなく、学社融合をすすめる上で社会教育施設間の連携が求められる。

おわりに

学校での生活も学校外での生活も子どもが自分を生かせる場でなくてはならない。今回の研究では、生徒の興味と関心を引き出すことのできる授業実践への手掛かりを得ることができた。

また、体験学習の場で子どもたちの歓声と目を輝かせての取組は「成長しようとする」姿の顕示に他ならない。「生きる力」を育むものとして、本研究の成果をさらに広めていきたい。

最後に、本研究を進めるにあたり、丁寧なご助言をいただいた先生方、そして研究をご支援くださった研究担当者所属校の校長先生、並びに教職員の皆様に、心からのお礼を申し上げます。

[参考文献]

- 社会教育審議会答申（昭和46年4月）
- 社会教育審議会答申（昭和49年4月）
- 中央教育審議会答申（昭和56年6月）
- 臨時教育審議会答申（昭和62年8月）
- 生涯学習審議会答申（平成10年9月）

[指導・助言者]

- 元大正大学教授 湯上 二郎（平成9年度）
（前川崎市総合教育センター専門員）
- 桜花学園大学教授 伊藤 琢（平成10年度）
（川崎市総合教育センター専門員）

別表 1

身近な地域を知ろうアンケート集計結果

川崎市・宮前区・平地区、特に平地区について詳しく調べることによって、みんなの住んでいる地域をより『身近な地域』として知ることが、大切なことです。

小学校時代に学習したことや普段生活していて気付いたことなど頭に思い浮かべて、答えてみてください。このアンケートをスタートとして、地域に関するさまざまな学習が始まります。決して難しい学習ではありません。少しでも思考（Thinking）してもらえばよいのです。協力をお願いします。

(1) いったい川崎市は、神奈川県のあるのどこだろうか。下の図Aで川崎市に色をぬってみよう。

図A



○川崎市を知らない人に川崎市を紹介してみよう。

- 例えば：東京都の隣に位置する < >内は人数
- ・多摩川に近い<31>・横浜市の隣<16>・東京都の隣<8>・海がある<7>・公害<5>・県の東端<4>
- ・平瀬川、二ヶ領用水<4>・人口が多い（100万都市）<3>・市民ミュージアム、等々カアリーナ<2>
- ・東名インター<2>・アクアライン<1>・読売ランド<1>

(2) あなたの住んでいる宮前区は、川崎市のどこにありますか？

○下の図Bで宮前区に色をぬってみよう。

図B



○宮前区を知らない人に宮前区を紹介してみよう。

例えば：東名高速が通っている。

- ・緑、森林公園<11>・東名インター<9>・住宅地、団地<7>・坂が多い<6>・向丘遊園地<5>・平瀬川<3>

(3) 平地区周辺で有名な（知っている）ものには、どんなものがありますか？

○神社やお寺

- ・白幡神社<83>・つつじ寺<31>・あじさい寺<14>
- ・東泉寺<8>・妙楽寺<3>

○農業

- ・野菜<18>・矢沢農園<15>・米<9>・山田<9>
- ・田畑<8>・ビニールハウス<1>

○工場

- ・自動車工場<16>・パン工場<4>・紙工場<2>・コカコーラ配送場<2>・鉄工場<2>・木材工場<1>

○建物

- ・ダイクマ<38>・ローゼン<28>・団地<11>・平中学校<11>・子ども文化センター<10>・向丘遊園地<6>・マツモトキヨシ<6>・民家園<1>

○その他

- ・ダイクマ<11>・ローゼン<6>・マクドナルド<6>
- ・平瀬川<5>・マツモトキヨシ<5>・森林公園<3>
- ・向丘遊園地<3>・団地<2>

(4) あなたは、地域行事に参加したことがありますか？

○ある人は、何に参加しましたか。例えば：祭りなど

- ・地域の祭礼<74>・清掃活動<18>・廃品回収<4>
- ・ラジオ体操<3>・バザー<2>・スポーツ教室<2>

○もし、地域にこんな行事があったら参加したいと思うものを書こう。例えば：3ON3大会など

- ・スポーツ大会<14>・イベントなど<3>

(5) あなたは、平地区が好きですか？

- 好きな理由：緑、森林<18>・便利な店がある<18>
- ・向丘遊園地<2>・東京、横浜に近い<2>・静か<2>

- 嫌いな理由：坂が多い<11>・空気が汚い<7>・駅がなく不便<4>・店がない<3>・遊ぶ場所がない<3>・いなか<3>

別表 2

⑧ 指 導 計 画 「 地 域 を 知 ろ う 」 (次 元 案)

- ① 各 次 元 の 目 標
- 1 次 地 域 を 知 ろ う (地 域 の 概 況)
 - 2 次 地 域 の 形 状 を 知 ろ う (地 域 の 輪 廓)
 - 3 次 地 域 の 特 徴 を 知 ろ う (地 域 の 特 徴)
 - 4 次 地 域 の 変 化 を 知 ろ う (地 域 の 変 化)
 - 5 次 地 域 の 環 境 を 知 ろ う (地 域 の 環 境)
- ② 支 援
- 1 次 地 域 の 概 況 を 知 ろ う (地 域 の 概 況)
 - 2 次 地 域 の 形 状 を 知 ろ う (地 域 の 輪 廓)
 - 3 次 地 域 の 特 徴 を 知 ろ う (地 域 の 特 徴)
 - 4 次 地 域 の 変 化 を 知 ろ う (地 域 の 変 化)
 - 5 次 地 域 の 環 境 を 知 ろ う (地 域 の 環 境)

多摩丘陵、平瀬川のこのことを知ろうとする。

この水形、多摩丘陵、平瀬川のこのことを知ろうとする。

(T . T . などさまざまに形態を検討する。)

日付	生徒の学習活動	科学指導員の支援・留意点	平中の支援(各教科)	(学年)	評価・留意点など
2/1	小学校で学習した地域のことを思い出そう。		○生徒の実態調査(レディネス調査をする)		○地域学習の知識
7/6	○自分の住む地域を思い出す。 ○多摩丘陵の地形を調べる。 ○多摩川の水を調べる。 ○多摩川の水を調べる。 ○多摩川の水を調べる。	○「地域を知ろう」というテーマに向けた支援を行う。 ○湧水地についての資料の準備	○水質調査、湧水調査の方法検討		○地域への興味、関心をもち ○班編成
7/8-10	○学校の周りや地域の地形を調べる。 ○多摩川の水を調べる。 ○多摩川の水を調べる。 ○多摩川の水を調べる。	○生徒の興味や関心のちがいで、いくつかのグループに編成する。 ○科学指導員が主役になる指導者(平瀬川)について説明をする。	○科学指導員が主役になる指導者(平瀬川)について説明をする。 ○科学指導員が主役になる指導者(平瀬川)について説明をする。		○地図の準備 ○社会科教師が色塗りをし、頁本に貼る。 ○地図作業の進度
7/20	○多摩川の水を調べる。 ○多摩川の水を調べる。 ○多摩川の水を調べる。 ○多摩川の水を調べる。	○平瀬川の水を調べる。 ○多摩川の水を調べる。 ○多摩川の水を調べる。 ○多摩川の水を調べる。	○平瀬川の水を調べる。 ○多摩川の水を調べる。 ○多摩川の水を調べる。 ○多摩川の水を調べる。		○社会環境の変化 ○生活環境について理解する。 ○班別の活動
3/6	○多摩川の水を調べる。 ○多摩川の水を調べる。 ○多摩川の水を調べる。 ○多摩川の水を調べる。	○自然の中での実体験の重要性を体験する。	○湧水地の実地調査の方法を確認する。 ○湧水地の実地調査、水質調査		○班別活動
12月 本時	○「地域を知ろう」の学習から体験できた感想などを発表する。 ○「地域を知ろう」の学習から体験できた感想などを発表する。 ○「地域を知ろう」の学習から体験できた感想などを発表する。	○調査結果のまとめを発表させる。 ○発表の形態も検討する。 ○発表の形態も検討する。	○調査結果のまとめを発表させる。 ○発表の形態も検討する。 ○発表の形態も検討する。		○発表内容の確認 ○発表の形態も検討する。 ○発表の形態も検討する。
	○環境の変化や生活の変化をさらに理解するために、	○環境の変化や生活の変化をさらに理解するために、	○環境の変化や生活の変化をさらに理解するために、		○課題の検討

別表 3

- < 1次元の目標と支援 > 授業期間 2月6日(土)の3校時に初め一斉授業を実施し、クラス別の作業をした。満足指導致課後などを使った。
 (1) 目標 (1)地域のことに興味・関心をもち、多摩丘陵、早瀬川のことを知りようとする。
 (2)地形のなごや湧水、水質調査の意義を理解する。
 (2) 支援 (1)指導・評価方法の検討(教師側)科学館の職員、地域のひととのT.T.などさまざまな形態を検討する。
 (T.T.の略号について、T.は科学館職員、T.は早瀬中学校社会科教師、T.は理科教師、T.T.は早瀬中学校教師とする。)

学習活動(予想される生徒の活動)	科学館職員の支援・留意点	平中の支援(各教科) (学年)
(1)自分たちの住む、平地区に関心をもち、今までの経験や資料を振り返って考えよう。 ・多摩丘陵と多摩川の支流である早瀬川流域についてT.Kの説明を聞き地域の地形の特徴を理解する。 (2)平成5年の地図を調べ、個別に水系を記入していった。(水系について早い生徒は時間内で記入できた。)	(1)学社連携の視覚についてこれからの説明をする。(T.T) (2)生徒への講師の自己紹介 (3)「地域を知ろう」というテーマに向けた支援を行う。(T.K T.T T.S T.T T.T) (4)早瀬川とその流域の一部である平地区の地形について説明する。 (5)平成5年の地図を準備し、地形図の原本を社会科教師が作成し、カラーコピーをクラス別に準備した。(T.K T.S T.T T.T) ・色塗りは次回までの宿題にした。	

- < 2次元の目標と支援 > 授業期間 2月8日~10日の理科や社会科の授業の中で実施した。色塗りは2時間扱いとして、宿題にした。
 (1) 目標 (1)地図に色塗りをする作業を行うことができる。
 (2) 支援 (1)指導方法の検討(複数クラスを別々に指導)

学習活動(予想される生徒の活動)	科学館職員の支援・留意点	平中の支援(各教科) (学年)
(1)中学校や自分の住む地域について地図を見て、地域の変化などを調べる。 ・50、70メートル等高線の記入、色塗りをする。 (2)地図の見方や地図の色塗りを学習する。 ・授業の席上になり、地域の地形を認識、谷と丘陵のようすを認識する。 ・「みんな生まれ早瀬川」というイラストマップで、早瀬川流域や小さな谷の水系、湧水の出る地形を理解する。 ・湧水調査や水質調査の意義を知る。	(1)科学館職員による地図の見方の説明(T.T. T.T.クラスの巡回指導) ・「みんな生まれ早瀬川」(イラストマップ)を配布した。 ・等高線や川の位置からわかる谷間の地形と川の様子について説明をした。 (2)説明は科学館職員が主に担当、平中教師が補助的(T.S T.T) (3)湧水地について資料の準備 ・水質調査、湧水調査の方法検討(T.T) ・地図と湧水の関係、水質調査の簡単な内容について説明した。 (色塗りが終わらない場合、家庭学習にした。)	

- < 3次元の目標と支援 > 授業期間 2月20日の3校時に一斉授業をし、視覚に3月6日の自然観察への学習活動の準備を行う。
 (1) 目標 (1)地図から昔と現在の平地区の地形的、社会的な変化を知る。
 (2) 支援 (1)指導方法の検討(1学年一斉に指導T.K T.S T.T.、別活動の支援はT.T. T.T)

学習活動(予想される生徒の活動)	科学館職員の支援・留意点	平中の支援(各教科) (学年)
(1)平地区周辺の新旧の地図を比較して地域の自然、地形的、社会的な環境の変化を考える。 ・道路や交通機関の変化が人為的に地形や自然が変化させてきたことから生活の歴史と変化を知る。 (2)自然環境はどんなだろう。 ・地域の湧水地を調べる。 ・水質調査の内容や方法を調べる。	(1)明治から昭和の地図で、地域がどう変化してきたかを思考するための支援をする。 (2)湧水地の資料などを準備し、支 (1)湧水地の調査の方法を検討する。 擬する。	

- < 4次元の目標と支援 > 授業期間 3月6日の1~3校時授業、青少年科学館と生田緑地で実施し、別活動の学習活動を行う。
 (1) 目標 (1)地図を使った地形や湧水地など、自然観察の実地調査を体験する。
 (2) 支援 (1)自然観察をした調査結果をまとめ、発表の準備をする。
 (2) 指導方法の検討(科学館の職員や教師のT.T.による安全指導や実地調査の指導)
 (3)観察や調査の結果をまとめ、発表するための準備を支援する。

学習活動(予想される生徒の活動)	科学館職員の支援・留意点	平中の支援(各教科) (学年)
(1)観察活動について、青少年科学館の職員から説明を聞く。 (2)色塗りをした地形図をみながら、生田緑地の実地調査を行なう。 ・地形的な観察 ・湧水地の観察・水質の調査 (3)自然の中での、調査活動から体験できた感想などを話し合う。	(1)自然の中での実体験の重要性を体験できるように支援をする。(T.K T.S T.T) (2)実地調査、観察について安全面の指導と支援(T.K T.T T.T) ・生田緑地の湧水地から採取した水の水質調査を行う。 ・別活動への巡回指導と支援(T.K T.T T.T) (3)調査結果のまとめをグループ別に作成させる。	

- < 5次元の目標と支援 > 授業期間 3月12日の1~3校時授業(学社連携授業発表会)
 (1) 目標 (1)生田緑地の実地調査や自然観察によって理解したことを発表し合う。
 (2) 支援 (1)発表の発表を聞く態度、質問などをするマナーを身につける。
 (2) 指導方法や資料などの支援、科学館の職員、地域のひととのT.T.などさまざまな形態を検討する。

学習活動(予想される生徒の活動)	科学館職員の支援・留意点	平中の支援(各教科) (学年)
(1)「地域を知ろう」という学習から体験できたことを発表し合う。 ・地域の地形的特徴やその変化を知り、自分たちの考えをまとめる。 ・湧水地の地形的特徴や水質についてわかったことを発表する。 (2)環境の変化や生活の変化をさらに理解するために、次の課題を考える。	(1)調査結果のまとめを発表させる。(発表の形態を検討する。) (2)発表を聞き、環境の変化や生活の変化をさらに理解するように支援する。 (3)次の課題を考えられるように支援していく。	